授業の中で「問いをつくる」力をどう育てるか

生徒自身が問いをもち、問いかけていく力をつけることは大切だけど難しい。どのように伸ばせばいいか、ヒントを取材しました。

取材・文／清水由佳（ライター・キャリアカウンセラー）

まずは生徒への興味を示す「問いかけ」を意識する

社会の中で、自ら考え、周囲と協働して、物事を解決させていくためには、「問いかけ力」が大事だと、社会起業家を支援する株式会社エンパブリック・代表取締役・広石拓司さんは言う。

「地域の課題を解決しようとしたとき、地域住民や協力者の存在は不可欠です。しかし、『これが解決策で、こうすべきだ』と説得しようとしても、人はなかなか動いてくれません。むしろ反発されることもあります。ところが、『あなたは何を大切に思っていますか？』とか『子どもの貧困は問題だと思いませんか？』と問いかけると、周りの人は関わりやすくなります。今求められているのは、従来のような縦型の命令指揮系統のリーダーではなく、参加しやすい場をつくるファシリテーター型リーダーです。そのためには、〝問いかけ力〟を身に付けることが重要なんです」

そんな「問いかけ力」は、生徒だけでなく教師にも重要な力。まずは、生徒に答えを求めるのではなく、生徒が自ら考えられるような「問いかけ」を意識することも大切になりそうだ。

「例えば、『忙しくて人手が足りない』と言われるのと、『○○が得意なあなたの力を貸してほしい』と言われるのでは、まったく違いますよね。前者は『忙しい』という出来事に意識が向かっていますが、後者は相手に関心を向けています。つまり、両者の違いは、発言する人の姿勢や考え方の違いに由来しています。相手とどういう関係をつくりたいか、が反映されるんです。それと同じように、〝どう問いかけるか〟を理解することが大事です」

アクティブラーニングなどで生徒自身の考えや問いを促そうと思っても何だかうまくいかないというケースの場合、教師の側の姿勢に原因があることも少なくないという。

「生徒が何を考えているのか、どういう視点をもっているのか、生徒自身に興味をもつことが大事です。教師の問いかけは、生徒が自ら考え、自分の視点や考えに気づくのを手伝う役割。ところが、つい『良い質問だね』などと評価し、誘導したくなってしまう。それでは、生徒は〝答え合わせ〟をしようとしてしまって、自らの問いを出すことができなくなります。とはいえ、頭ではわかっていても、実行するとなると、これがなかなか難しい。そういう難しさを自覚するだけでも、まずは大切だと思います」

決めつけを排除した素朴な疑問を面白がる

そこで広石さんは、生徒の問いをつくる力を伸ばすには、まずは日頃の「決めつけていること」「思い込んでいること」を疑問に変えていくトレーニングを勧める。

「『本当に○○なのか？』『どうして○○なのか？』に置き換えることから始めるのでもいいと思います。例えば、『学校は本当に必要なのか？』とか。答えが出ないような問いとじっくり向き合ってみる。社会の中で、正解がない問いが増えているからこそ、答えを求めるのではなく、問いと共に生きる。しかも、それを一人ではなく仲間と共有する。そして、素朴な疑問が面白いと、そんな気持ちになってもらえるといいですね」

そのためのワークとして、1時間、ずっと問いをつくり続ける授業を、広石さんは提案する。

「企業研修などでもよく行うのですが、〝理想の上司〟などのテーマを設定し、まずは、一人でいくつもの問いをつくってもらいます。その後、他の人の問いに、さらに問いを重ねていく。答えが思い浮かんでも、無理矢理にでも問いにします。そうやって1時間、ひたすら『問い』をつくり続けます。ところが終わったときに、『こんなに深く理想の上司像について考えたことはなかった』といった感想が出てきます。問いをつくるとは、それほど深い考えを促す作用があります」

問いをつくるためには、論点を定め、考え、整理することが不可欠。しかも他者の問いに刺激を受け、よりテーマに興味をもつ。その循環が、思考を深めていくことになるのだ。

「ある科学者が、人が一番変化するのは、答えを見つけたときではなく、問いが生まれた瞬間だと言っていますが、まさにその通りだと思います。だからこそ、先生が問いを出すのではなく、生徒が問いをつくる機会をたくさん与えていってもらえるといいのではないでしょうか」



株式会社エンパブリック
代表取締役
広石拓司氏

東京大学大学院薬学系修士課程修了後、シンクタンク勤務。2001年からNPO法人ETIC.で社会起業家の育成に携わる。2008年、エンパブリック創業。行政や企業、個人に対して、正解のない時代に、新しい価値を生み出すためのアプローチを推進。さまざまなワークショップなどを実践する。慶應義塾大学総合政策学部・立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科などの非常勤講師も務める。
エンパブリックでは「問いかけ力を磨こう」などのゼミやワークショップを開催している。http://empublic.jp/

「問いをつくる力」を養うお薦めの本



『たったーつを変えるだけ～クラスも教師も自立する「質問づくり」』

アメリカでの「質問づくり」の手法と実践例が書かれた本著。広石氏も行っている「質問だけ」授業のルール（評価したり答えたりしないとか、意見や主張は疑問文に直すとか）や、具体的な手法などが詳しく書かれている。「質問づくり」だけの授業の効果なども、実際のケースなどとともに理解できる。

■ 生徒の自発的な「問い」を促す授業

授業の主体は“生徒”「どうしたい？」で授業が進む

かえつ有明中・高等学校（東京・私立）では、2015年から、探究型のクラスを1クラス設けている。金井先生は、その社会科を担当。ユニークな授業を展開している。

例えば1年次、近現代史の政治哲学における正義や功利主義などを理解するため、漫画『沈黙の艦隊』の一場面を取り上げ、自分ならどんな台詞を言うかを生徒それぞれが考える。その後、誌面に登場するいろいろなタイプの政治家のどの発言に近いかを選び、同じタイプでグループになる。さらに、満州事変や太平洋戦争を、それぞれのタイプで考えるとどう捉え、決断するかをシミュレーションし発表した。

「授業では、まず自分の意見をもち、次に他者の異なるさまざまな意見を聞き、そこから一緒になってどうしたらいいか第3の道を探る。その3段階を意識しています。その繰り返しの中で、生徒は驚くほど成長し、自分なりの考えや問いをもつようになります」

2年次には、生徒たちから「自分たちで面白いテーマを選び、教科書を作りたい」と提案され実施した。自然と授業は生徒主体となり、2学期後半には「次、何をやろうか？」と金井先生から逆に生徒に問いかけるほど。そんな金井先生の「どうする？」「どうしたい？」という問いかけが、さらに次の好奇心を刺激する。

「自分の中から出てくる好奇心を大事にしたいと思っています。自分から動いて考え、理解したことはずっと覚えていますし、深く考え試行錯誤することで物の見方が身に付く。それがとても重要だと思います」



かえつ有明中・高等学校
金井達亮先生

2001年より西武学園文理中学・高等学校で社会科教諭として勤務し、2013年に現校へ。授業では「自分が面白そうと思うことをやってみよう」と工夫を凝らす。



金井先生は、授業をほとんど図書館で行うという。そうすることで、疑問に思ったことを生徒はすぐに調べ、知識を深める。おかげで、このクラスの生徒の図書貸し出し数は、他クラスの100倍以上にも上るとか。



発表も多く、物怖じしなくなる。授業見学に来る社会人とも、会話を楽しむ姿に金井先生も驚くとか。



日本史を妖怪で読み解いたり、歴史ゲームを作ったり、先祖のルーツをたどったり。楽しそうに学ぶ。

高校生の主体的な進路選択を応援する先生のための進路指導・キャリア教育専門誌
Career Guidance
キャリアガイダンス



【最新号】Vol.417　2017年5月発行
■ 特集
「多様性」で拓く 生徒の未来
[Interview]
これからの社会でなぜ「多様性」が求められるのか
[Company Case]
変わる企業の働き方 その狙いを探る
[Educational Case]
学びが深まる 取り組み実践レポート
●多様な学校間連携で協働する場／石川県教育委員会 他6事例
[Special Message]
誰もが楽しく生きるために 教育がいま変わるとき
鈴木 寛（文部科学大臣補佐官）
■ 連載
●先進校に学ぶキャリア教育の実践
大阪府教育センター附属高校（大阪・府立）
●教科でキャリア教育［物理］
高原 隆先生 瀬谷高校（神奈川・県立）

『キャリアガイダンス』誌は全国の高校に贈呈しています（校長、教頭・副校長、進路指導主事先生宛に郵送）
バックナンバーの記事はすべてWEBサイトで閲覧いただけます
http://souken.shingakunet.com/career_g/　キャリアガイダンス　検索